

【21】頭首工と取水堰

河川の水面を高くして取水の便を良くするために、河川を横断する堰（取水堰）を設けることは、堰の構造や規模を別にして古くから行われています。水田に取水するための小溪流の堰の原形は弥生時代に見られるといえますから、二千年以上の昔から堰は造られてきたわけですね。

さて、本稿でいう“頭首工”（とうしゅこう）という用語は都市部では珍しくなりましたが、農村地帯の河川では全国至る处でお目にかかる名称です。農業用水、灌漑用水の取水のための堰をとくに頭首工といいます。実用的に云えば農水省など農業部門が発注者となって建設した取水堰を頭首工と呼ぶという方が話は早いでしょう。

この言葉の起源は近代にはいり海外から農業工学の知識が入ってきたときの“head works”の翻訳です。もともとは、農業用水を河川から取水するための一連の施設、堰、取水口（堤防を横切るときは樋管）、沈砂池、分水工などの施設の総称だったのですが、時代とともに主要な施設としての堰が主役になり頭首工の名も堰が独占してしまうようになりました。

近年では堰は、農業用水、都市用水、発電など多目的に使われることが多いので〇〇堰とか〇〇大堰と呼ばれることが多いのですが、古くからの頭首工も改築されて頭首工の名が引きつがれています。

田園地帯の河川を歩いて頭首工に出会ったら（釣りの名所になっていることも多い）昔の人の農業開発の苦労の記念碑として想いを深めて下さい。